

活用企業は 32.7%、 効果実感は高い一方で、 正確性や運用ルールに課題

文章校正や情報収集を中心に利用は進むが、
格差拡大や検証負担への懸念も

鹿児島県・生成 AI に関する企業の動向調査(2026 年 3 月)



本件照会先

日比生 秀一(支店長)
帝国データバンク
鹿児島支店
099-223-8208
info.kagoshima@mail.tdb.co.jp

発表日

2026/06/10

当レポートの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。
当レポートはプレスリリース用資料として作成しております。著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および転載を固く禁じます。

SUMMARY

生成 AI を業務で『活用している』鹿児島県企業は 32.7%だった。活用企業では「業務への効果が出ている」が 88.6%。主な活用業務は「文章の作成・要約・校正」が最も多く、「情報収集」が続く。悪影響・トラブルでは「ない」が 65.7%であった一方で、「使いこなし格差の拡大」が 25.7%にのぼった。懸念・課題では「情報の正確性」「生成 AI を活用すべき業務の範囲」が最も高く、「専門人材・ノウハウ不足」が続いた。

調査期間は 2026 年 3 月 17 日～3 月 31 日

調査対象：鹿児島県企業 339 社、有効回答企業数は 107 社(回答率 31.6%)

はじめに

生成 AI をめぐっては、業務効率化や人手不足対応への期待が高まる一方、情報の正確性や情報管理、運用ルールの整備など、多面的な論点が指摘されている。

近年、生成 AI は一部の専門人材や大企業だけが利用する技術ではなく、限られた人員で生産性を高める手段の一つとして、人手不足や賃上げ対応、業務量の増加に直面する企業を中心に、関心が一段と高まっている。

一方で、生成 AI の活用が広がるにつれて、単に「導入しているかどうか」だけでは企業の実態を十分に捉えにくくなっている。実際の業務でどのように使われているのか、どの程度の効果が実感されているのか、また、誤情報、情報漏洩、著作権・プライバシー、社員間の使いこなし格差といった課題がどのように表れているのかを把握することが重要になっている。

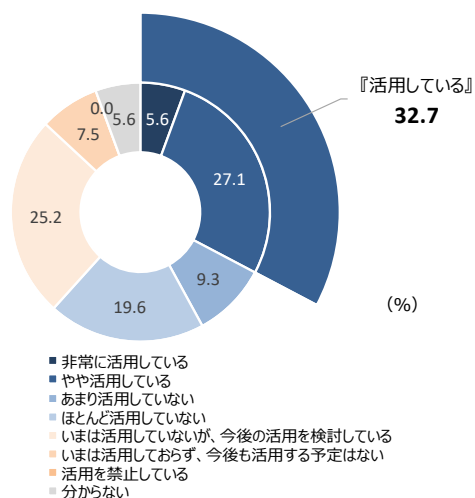
そこで、帝国データバンク鹿児島支店は、生成 AI の活用状況などについて調査を実施した。本調査は、TDB 景気動向調査 2026 年 3 月調査とともに行った。

生成 AI を企業の 32.7%が活用、大企業ほど高く

生成 AI を業務で『活用している』（「非常に活用している」+「やや活用している」）企業は、全体の 32.7%だった。内訳は、「非常に活用している」が 5.6%、「やや活用している」が 27.1%。一方で、「あまり活用していない」は 9.3%、「ほとんど活用していない」は 19.6%であり、低活用層もなお約 3 割にのぼる。「いまは活用していないが、今後の活用を検討している」は 25.2%で、活用余地を残す企業は 4 社に 1 社の割合となった。生成 AI はすでに一定程度広がっているものの、企業全体としてはなお移行期にあるとみられる。

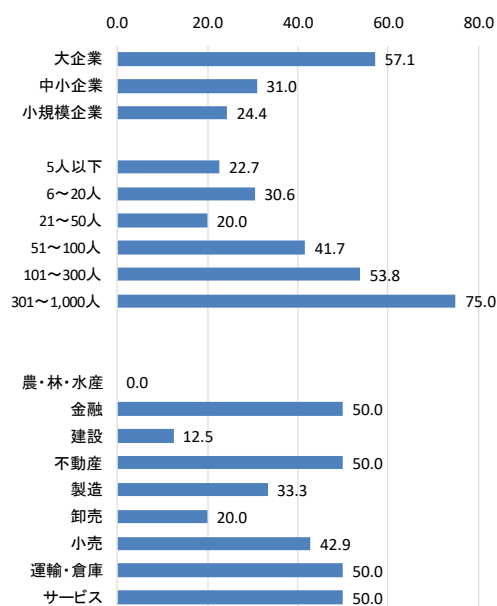
生成 AI の活用状況～全体、規模・従業員数・業界別～

(a) 全体



注1：小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100にならない
注2：母数は有効回答企業は107社

(b) 規模・従業員数・業界別（『活用している』割合）



規模別にみると、企業規模が大きいほど活用率が高い傾向が明確に表れた。大企業では『活用している』が57.1%と半数を超えたのに対し、中小企業は31.0%、小規模企業は24.4%であった。従業員数別でも同様の傾向がみられた。

企業からは、活用を前向きに捉えた「多様な業務に活用でき、業務効率化や時間短縮に大きな効果があると感じている」という声がある一方で、「ツールとしては便利であることは認識しているが、人が考える能力が低下するのではないかと危惧する」「万能なツールではないので、必要な時以外は使用せず、自分で考えて答えを出した方が仕事には有益と感じる」といった慎重な意見も聞かれた。活用そのものの是非よりも、どう使うかに対する関心が強いことがうかがえる。

主な活用業務、「文章の作成・要約・校正」が45.7%でトップ

生成AIを業務で活用している企業に、主にどのような業務で活用しているか尋ねたところ、最も多かったのは「文章の作成・要約・校正」(45.7%)であった。次いで、「情報収集」(20.0%)、「コード生成などのプログラミング支援」(17.1%)、「企画立案時のアイデア出し」(8.6%)が続いた。

全体として、生成AIは現時点では、業務判断そのものの代替というより、情報整理や文章化など、判断の手前にある業務の補助として用いられている様子がうかがえる。

主な活用業務～全体・規模・業界別～

	全体	規模別		
		大企業	中小企業	
			中小企業	小規模企業
文章の作成・要約・校正	45.7	75.0	41.9	50.0
情報収集	20.0	0.0	22.6	10.0
コード生成などのプログラミング支援	17.1	0.0	19.4	10.0
企画立案時のアイデア出し	8.6	0.0	9.7	20.0
経理・経費計算などの事務の代行	2.9	25.0	0.0	0.0
翻訳・外国語の文章の作成	2.9	0.0	3.2	10.0
その他	1.7	0.0	3.2	0.0

注：母数は、生成AIを『活用している』企業35社

規模別にみると、全ての規模で「文章の作成・要約・校正」への集中度が高かった。次いで、中小企業では「情報収集」(22.6%)が多く、限られた人員のなかで、情報収集やたたき台作成の効率化を重視している可能性がある。

企業の声でも、利用領域の広がりが確認できる。「契約書の確認」、「議事録作成に活用」、「プレゼン資料、メール返信、ウェブ構築に非常によく活用している」など、業務特性に応じた使い方が進みつつある。

他方、「一つに絞れない。情報収集、文書作成、データ分析、翻訳、プレゼン資料作成、動画作成等、いろいろ使っている」など、単一用途だけでなく複合的に利用している企業も少なくない。

業務への効果は 88.6%が「ある」と実感

活用企業に対して、生成 AI の業務への効果を尋ねたところ、「大いに効果が出ている」(40.0%)と「やや効果が出ている」(48.6%)を合わせた『効果あり』は 88.6%に達した。「どちらともいえない」は 11.4%で、「あまり効果が出ていない」「ほとんど効果が出ていない」はゼロだった。生成 AI を実際に使っている全ての企業で、何らかの効果を実感している結果となった。

業務への効果

(構成比%、カッコ内社数)

	効果あり	大いに効果が出ている	やや効果が出ている	どちらともいえない	効果なし	分からない／不回答	(N)
全体	88.6	40.0	48.6	11.4	0.0	0.0	(35)
大企業	100.0	25.0	75.0	0.0	0.0	0.0	(4)
中小企業	87.1	41.9	45.2	12.9	0.0	0.0	(31)
小規模企業	80.0	40.0	40.0	20.0	0.0	0.0	(10)

注：母数は、生成AIを『活用している』企業35社

規模別では、中小企業の 41.9%で「大いに効果が出ている」と回答しており、大企業の 25.0%を上回った。人手の限られた企業ほど、文章作成や情報整理の効率化を感じている可能性がある。

企業からは、「情報収集や、自分の見解の答え合わせができる点は非常に助かっている」、「事案の検討において、自力で一から取り組む場合と比較して、見落としや勘違いを防ぎ、時間を大幅に短縮できる」といった声が寄せられた。生成 AI は、作業の単純な自動化というより、情報整理や発想補助を通じて、業務の速度や見落とし防止に寄与しているとみられる。

企業の 3 社に 2 社が悪影響やトラブルを「ない」とする一方、能力や成果の格差拡大を約 2 割が認識

活用企業に対して、生成 AI 活用による悪影響やトラブルを尋ねたところ、「悪影響やトラブルはない」が 65.7%で最も多かった(複数回答、以下同)。現時点では、「会社の機密や保有する個人情報などが流出した」、「自社のデータが勝手に外部の AI の学習に使われた」など直接的なトラブルはなく、重大な事故が広範に表面化している状況ではないとみられる。

悪影響・トラブル(複数回答、上位 6 項目)～全体・規模別～

(%)

	全体	大企業	中小企業	小規模企業
悪影響やトラブルはない	65.7	75.0	64.5	70.0
AIを使いこなせる社員と使いこなせない社員の間で、能力や成果の格差が拡大した	25.7	25.0	25.8	20.0
社員から類似した意見や報告が出るようになり多様性が低下した	8.6	25.0	6.5	0.0
社員が業務をAI任せにして、仕事への意欲やスキルが低下した	2.9	25.0	0.0	0.0
会社の機密や保有する個人情報などが流出した	0.0	0.0	0.0	0.0
自社のデータが勝手に外部のAIの学習に使われた	0.0	0.0	0.0	0.0

注：母数は、生成AIを『活用している』企業35社

一方で、相対的に高かったのは、「AI を使いこなせる社員と使いこなせない社員の間で、能力や成果の格差が拡大した」の 25.7%となり、活用が進む企業ほど、使いこなしの差が可視化されやすいことがうかがえる。また、「社員から類似した意見や報告が出るようになり多様性が低下した」(8.6%)、「社員が業務を AI 任せにして、仕事への意欲やスキルが低下した」(2.9%)といった人材育成に関する懸念がみられた。生成 AI の影響は、事故としてよりも、組織運営や人材育成の課題として表れやすいと考えられる。

生成 AI 活用に関する懸念・課題

生成 AI 活用に関する懸念・課題として最も多かったのは、「情報の正確性」「生成 AI を活用すべき業務の範囲」(ともに 43.0%)であった(3 つまでの複数回答、以下同)。次いで、「専門人材・ノウハウ不足」(41.1%)、「情報漏洩のリスク」(32.7%)、「著作権・プライバシー保護など法的規制」(20.6%)が続いた。これらの結果から、企業にとっての主要な論点は、導入可否よりも、運用の仕組みや管理体制、人材面にあることが分かる。

企業からの声では、「AI が時にうそを言う」「誤った情報を正解ととらえてしまった」といった正確性に関する指摘がある一方、「AI に頼る頻度が増えてスキルが低下する心配がある」「上長の確認と検証に手間がかかるようになった」といった組織的な課題への言及もみられた。活用が進むほど、ツールそのものの有効性より、使い方と確認手順が重要になることを示している。

また、「AI をどう活用すれば期待する結果が出るのかという目的をしっかりと計画して導入したい」や「社内ルール整備と適切な運用が今後の課題」といった声が寄せられている。生成 AI の課題は、単なるコストや機能不足だけでなく、社内のルール、教育、責任分界の設計にあるとみられる。

懸念・課題(3 つまでの複数回答)

	全体	大企業	中小企業	
			中小企業	小規模企業
情報の正確性	43.0	42.9	43.0	41.5
生成AIを活用すべき業務の範囲	43.0	42.9	43.0	39.0
専門人材・ノウハウ不足	41.1	42.9	41.0	36.6
情報漏洩のリスク	32.7	71.4	30.0	24.4
著作権・プライバシー保護など法的規制	20.6	14.3	21.0	22.0
トラブル時の責任所在などのルール整備	19.6	14.3	20.0	17.1
システム導入への資金不足	14.0	14.3	14.0	17.1
懸念や課題はない	4.7	0.0	5.0	7.3
その他	1.9	0.0	2.0	0.0

注：母数は、有効回答企業107社

おわりに

本調査では、生成 AI を業務で活用している鹿児島県企業が全体の 3 割台に達し、活用企業の全てで効果を実感している一方で、情報の正確性、専門人材・ノウハウ不足、活用範囲、情報漏洩、ルール整備といった課題が上位にあがった。現時点で悪影響・トラブルそのものはないものの、使いこなし方の格差や検証負担、育成面での懸念が表れており、生成 AI の導入が企業内の運用能力・レベルや教育体制を問う局面に入っていることがうかがえる。

今後の企業の取り組みとしては、まず、生成 AI を活用する業務範囲を明確にし、最終判断や確認の責任を人が担うことを前提とした運用ルールを整備することが重要となろう。また、情報管理のルールづくりや、出力内容を検証・編集するための社内教育も欠かせない。生成 AI の活用が進むほど、ツール選定以上に、社内の標準的な使い方をどう整えるかが問われることになる。

このため、政策面では、とりわけ中小企業が活用を進めるうえで、情報管理や検証手順、ルール整備に関する実務的な支援が求められる。単純な導入促進だけでなく、運用を下支えするガイドラインや教育機会、ノウハウ共有の枠組みを充実させることが、今後の普及と定着に資すると考えられる。生成 AI は、導入そのものの有効性よりも、使いこなすための仕組みづくりが成果を左右する段階に入っていると言えよう。